



Title	日本学生支援機構大阪日本語教育センターでの日本語教育実習報告
Author(s)	寒川, ちなつ; 白崎, 未桜
Citation	日本語講座年報. 2025, 2023-2024, p. 21-25
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/102671
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

【日本語教育実習・授業報告】

大阪大学外国語学部日本語専攻では、日本学生支援機構大阪日本語教育センターを始め、複数の日本語教育機関に少人数のグループで日本語教育実習をさせていただいています。日本語教育実習に参加するためには、指定された科目を履修し、模擬教壇実習を修了していなければなりません。その他、休学して海外の日本語教育機関でのインターンに参加したり、国内の日本語教育機関に非常勤講師として勤務したりする人たちもいます。

日本学生支援機構大阪日本語教育センターでの日本語教育実習報告

寒川 ちなつ 白崎 未桜

1. はじめに

2024年11月14日（木）から20日（水）まで5日間、日本学生支援機構大阪日本語教育センターにて日本語教育実習を行う機会をいただいた。本稿は、実習を通して得た気付きや学び、反省を記すものである。

（文責：白崎）

2. 実習概要

実習先の大坂日本語教育センターは、独立行政法人日本学生支援機構（JASSO）が国の支援を受けて運営しており、日本の高等教育機関に進学を希望する外国人留学生を対象とした日本語教育機関である。文部科学大臣により「準備教育課程」に指定された予備教育機関として、日本語教育及び基礎科目（数学、物理、化学、英語など）の教育を行っている。国費留学生や外国政府派遣留学生のみならず、私費留学生も受け入れており、現在は36の国と地域から来日した150人の学生が在籍している。1クラス20人以下の少人数体制で、毎週5日、毎日約6時間の授業を実施している。また、授業では大阪日本語教育センターの独自開発教材を使用している。

5日間の実習は「授業見学」「教案指導」「教壇実習」で構成されていた。初日はオリエンテーションと実

習の流れの確認が行われた。その他の時間は授業を見学させていただいた。見学は、実習で担当させていただいた1組（10月入学、初級クラス）の授業だけでなく、中上級クラスも含まれ、様々なレベルの授業に参加することができた。2日目からは、教壇実習の一環として「暗唱・書き取り」を担当した（表1 太字部）。「暗唱・書き取り」は実習生2名が隔日でそれぞれ2回ずつ行った。教案指導に関しては、実習前の打ち合わせで伝えられていた教壇実習の担当課に応じた教案を初日に提出し、ご指導いただいた。2日目、3日目も同様にご指導いただき、それぞれ教案を修正して、実習に備えた。そして、4日目、5日目は実際に教壇に立ち、授業を行った（表1 緑掛け部）。授業は1コマ50分であるが、教壇実習は1コマを2人で分けて25分ずつ担当した。

（文責：寒川）

3. 授業見学について

今回見学する機会をいただいたのは、初級クラスの1組～4組と中・上級のA組、E～H組、G組と日本事情演習の授業、そして JLPT の N2 級取得を目指すN2③クラスである。それぞれの授業で先生方が学生のレベルや教材の内容に合わせて授業をされていた。

（文責：白崎）

表1 実習のスケジュール

	11月14日	11月15日	11月18日	11月19日	11月20日
1	1組 見学 (暗唱・ 書き取り)	1組 実習 (暗唱・ 書き取り)	1組 実習 (暗唱・ 書き取り)	1組 実習 (暗唱・ 書き取り)	1組 実習 (暗唱・ 書き取り)
2	オリエンテーシ ョン	2組 見学	H組 見学	実習準備	G組 見学
3	1組 見学	教案指導	教案指導	1組 実習	実習準備
4	3組 見学	E組 見学	1組 見学	実習反省・指導	1組 実習
5	日本事情演習 IB	F組 見学	A組 見学	N2③	実習反省
6	実習・教案作成	1組 見学	4組 見学	J組 見学	1組 見学

3.1. 初級クラス

初級クラスは担当した1組を中心に、同じく10月に入学した学生で構成される2組、3組、4組の授業も見学させていただいた。授業では、先述のセンター独自教材『留学生のための日本語初級』が使用されていた。授業は基本的に、導入（イントロ）・練習（ドリル）・新字・本読み・新しい言い方（文型）・内容ドリル・練習帳の順で進められる。導入では、教科書を開けさせることなく、教師の語りのみでその課の場面を学生に想像させることになっている。学生がその中で出てくる新出の文型や語彙を理解し、ある程度自然に発話できるまでリピートや質問を繰り返していた。練習の段階では、学生を順番に指名し、全員に発話する機会を与えることで定着を図っていた。特に、1組は日本語レベルの高い学生が多くいたため、教師のキューに対する反応も素早く、非常にテンポよく授業が進められていた。様々な授業を見学させていただいたが、全てに共通していたのは、学生自身のことを答えさせるように工夫された質問が多かったということである。自分のことを話させることにより、新しい文型の理解が促進されたり、クラス内の活発なコミュニケーションのきっかけになったりすることが分かった。

一方で、教師の問い合わせに対して反応が薄いクラスもあり、そこでは教師が例文や絵カードを使って、とにかく何度も何度も学生に発話させていた。口慣れさせることが発話への負担軽減につながり、学生たちの反応も徐々に良くなっている様子であった。教師は学生たちのレベルや様子を考慮し、臨機応変に授業を展開していく必要があることを実感した。

（文責：寒川）

3.2. 中級・上級クラス

中上級のクラスでは、センターオリジナルの教科書である『留学生のための日本語中上級』のテキストを用いた授業がなされていた。クラスによって進度が違っていたため、同じテキストの異なる課を取り扱っておられる授業を見学することができた。授業では、教科書に載っている文章を読み進めながら、文章の内容やテーマに関する質問、新しい文法や表現に関する質問など先生方の問い合わせに対し、学生は積極的に質問に答えていた。新出表現を用いた作文を作るという場面では、持っている日本語の知識でユーモアのある回答をする学生が多く、先生

と学生の穏やかな雰囲気が印象的であった。先生のお取りはからいにより、いくつかのクラスでは交流の場を用意していただけた。専門学校や大学への進学を希望している学生が学んでいる日本語学校であるだけあり、大学での生活や進路選択についての質問が多くかった。

（文責：白崎）

3.3. 日本事情演習

日本文化について学ぶために開講されている授業が「日本事情演習」である。見学したのは、日本での面接と年賀状について扱う授業だった。面接に関する部分では、面接の際の身だしなみや面接時のマナーを中心に学んでいた。専門学校の面接を控えている学生が多かったため、授業内では専門学校の入試を想定して面接の練習を行う場面があった。その際に面接官役として授業に参加させていただいた。年賀状に関する部分では、先生が私たち実習生に手紙や年賀状についていくつか質問をしてくださった。

（文責：白崎）

3.4. N2③

この授業はJLPTのN2受験対策として実施されているものである。主に文法と読解の問題に取り組んでいた。まず学生が問題を解いてから、答え合わせ、解説という流れで進められていた。読解に関しては、文章の解説のみならず、解答する際のコツについても触れられており、実践的な授業であるという印象を受けた。

また、見学させていただいた中では唯一、パワーポイントを用いて実施されていた授業であった。実際に教師が書き込みする様子を見せることで、視覚的にも解答の手順が分かりやすく示されていると感じた。

（文責：寒川）

4. 教壇実習について（寒川）

4.1. 暗唱・書き取り

大阪日本語教育センターでは、毎日2回の「暗唱」（1限目と4限目）と1回の「書き取り」（1限目）が実施されている。暗唱は、学生がテキストに対応した会話形式の暗唱文を事前に覚え、ランダムに指名されたペアで発表するというものである。教師はその場で会話を聞き、必要に応じてフィードバックを

与える。書き取りでは、指定された既習の課の新出文法や語彙を織り交ぜた 5 文を教師が作成、音読し、学生はノートに正しく書き取りを行う。特に、新出の漢字やカタカナを積極的に文章に取り入れることで、定着を図る目的がある。教師は 1 つの文章につき計 3 回、それぞれスピードを変えて読み上げる。実施後、ノートを回収し、漢字も含めて正確に書くことができているかを確認する。

筆者らは、1 限目の暗唱・書き取りを実習 2 日目から担当させていただいた。なお、作成した書き取りの文章は事前に担当の先生に確認していただき、授業に臨んだ。

筆者は 11 月 15 日と 19 日に暗唱・書き取りを担当した。初めて暗唱を担当した際には、細かい助詞の間違いを指摘したり、正確な発話ができるまで何度も言い直しをさせたりすることが疎かになってしまった。助詞の間違いに気づいた際、流れを遮ってすぐに訂正すべきか迷い、結局何も指摘しないまま進んでしまった部分もあった。初回を終えて、遠慮は学生のためにはならないと深く反省した。

書き取りでは、音読のスピードや学生の出来具合を見ながら進めることに難しさを感じた。学生によつて書くスピードが様々で、1 番遅い学生に合わせるとかなり時間をとってしまうことになるため、次の文章を読み始めるタイミングの判断に悩まされた。指導教官の先生からは問題文の間隔が少々長すぎるというフィードバックを頂いた。2 回目の暗唱・書き取りでは 1 回目の反省と頂いたフィードバックを意識して取り組むことができたと感じている。学生の間違いも、できる限り自然な流れで訂正することを心掛けた。

暗唱・書き取りは通常の授業とは異なり、決まった流れや、手順を着実に踏むことで円滑に進められるものであった。もちろん臨機応変にフィードバックを与えるべきだという緊張感もあったが、教壇実習を控える筆者らにとって、学生の前に立って話すことに慣れる良い機会となった。

4.2. 教壇実習

表 2 実習内容（寒川）

日付	授業内容
11/19	受け身形

	<ul style="list-style-type: none"> ・無生物主語 ・迷惑受身
11/20	<ul style="list-style-type: none"> 敬語 ・いらっしゃいます ・まいります ・おります ・なさいます

教壇実習の初回は、無生物主語の受身と迷惑受身の導入・練習を、2 回目は上記（表 2）の敬語の導入・練習を担当した。

教案指導の際には、変換練習の文章を増やし、現実で使えるような例文にした方が良いというご指摘を頂いた。特に、迷惑の受け身は状況と合わせて考える必要があるため、自然な例文の作成に時間を要した。実際に使用されている場面がすぐに思いつかない自身の想像力の乏しさを痛感した。2 回の教案作成で配慮した点としては、自然な流れで導入することと、授業全体の構成を分かりやすいものにすることの 2 点が挙げられる。授業構成の分かりやすさに関しては、学生のスムーズな理解を促進するだけでなく、自分が授業を進めるうえでも、大いに役立ったと考えている。授業構成を何度も検討する中で全体の流れが頭に入り、実際の授業では、時間を考慮して省略してもいい部分や、逆に必ず押さえておきたいことをその場で適切に取捨選択することができた。

19 日の教壇実習では、学生とのコミュニケーションを取りながら想定した流れで授業を展開できた一方で、練習のパートにおいて曖昧なキーを出して、学生を混乱させてしまいそうになる場面があった。また、板書をしながら授業を行うのは筆者にとって初めての経験であり、授業後に指導教官の先生から文字を書くタイミングやホワイトボードの使い方にに関するアドバイスを頂いた。特に、口頭で文を言ってから板書し、集中するポイント（耳か目か）を絞る方が学生にとって分かりやすいというフィードバックは大きな学びとなった。20 日の実習は初回の反省と学びを生かし、どの情報をどの位置に配置するかといった板書計画を立ててから授業に臨んだ。また、キーを丁寧に出すことや、敬語を使用する状況を明確にイメージできるよう十分に説明することを意識した。一方で、タイムマネジメント等、後悔の残る部

分もある授業となつた。

2回の教壇実習を通して、日本語教師としての未熟さを痛感した。それと同時に、学生と関わり合いながら授業を作り上げていく楽しさを知ることができた。丁寧なご指導のもと、一から授業を作り上げる中で、多くの気づきや新たな視点を得ることができた。この実習での経験を糧に、今後も自己研鑽に励んでいきたいと思う。



写真1 教壇実習風景（寒川）

5. 教壇実習について（白崎）

5.1. 暗唱・書き取り

11月18日と20日に暗唱文と書き取りを担当した。音読ではどのタイミングでフィードバックを返したら良いかが分からなかつたほか、そもそもフィードバックを返さなければいけない助詞の間違いを聞き逃してしまう、というミスをしてしまつた。書き取りでは、既出の文章をどの程度改変したら良いかが分からず、教科書の文章をほとんどそのまま出してしまつた。これに関しては、見てくださつていた先生からアドバイスをいただき、20日分は新出漢字を混ぜた書き取り文を作成することが出来た。一方で、読む早さがゆっくりだつたというフィードバックや、単語のイントネーションが出身の関西のものであり、標準語のものではなかつた、などのフィードバックをいただいた。やはり話すことに関してはまだまだ修行が必要であると感じた。

5.2 教壇実習



写真2 教壇実習風景（白嶠）

表3 実習内容（白崎）

日付	授業内容
11/19	受け身形 <ul style="list-style-type: none"> ・わたしは～にVされました ・私は～に～をVされました
11/20	敬語 <ul style="list-style-type: none"> ・お～します ・お～ください ・お～になります

教壇実習で担当した授業内容は表3の通りである。初級クラスであり、学生は入学してから2ヶ月しか経っておらず、思いのほか未習単語が多かつた。そのため、例文に使う単語の選択に苦労した。教案を添削していただいた際には、単語の既習・未習のほかに、パターンプラクティスの例文の文法が自然でないものや、他の用法とも取れる文章についても指導していただいた。

1組が初級クラスの上級クラスであったこともあり、授業中は学生の多くがすでに文法事項を知っているようであった。また、新出単語に関しては添削をしていただいたうえで、1組が上級クラスということを鑑みて新出単語も使ってみることにしたところ、単語を知らない学生もいたものの、フォローを入れると新出単語も理解できていた。

1日目では、活用形を動詞のグループ毎に出そうと思い、教科書にも動詞をグループ毎に分けて書いていたのだが、誤って1グループの動詞を用いた活用練習中に2グループの動詞を出してしまったというミスをしてしまった。

授業後のフィードバックで活用形を書く際に 1 グ

ループの動詞は五段を意識させるような板書すること、先に文法事項を説明してから板書をした方がいいことなどを教えていただいた。

2日目の授業後には、前日に教えていただいたことを実践できていたというお褒めの言葉をいただいた一方で、教案を見るために目線が下に向いている時間が多かった、という指摘をいただいた。これに関しては、ある程度は教案の流れを頭に入れておいた方がいい、というアドバイスをいただいた。また、「わたしは」という形で提示した文をリピートさせる際に「わたしは」と、誤った助詞を提示してしまっている場面があったという指摘もいただいた。助詞のミスに関しては、コーラス後に助詞をもう一度確認すればよいというアドバイスをいただいた。

複数の先生方に授業をみていただき、フィードバックをいただく貴重な機会となった。先生方にいたいたいたフィードバックを今後にも生かしていくたい。

6. おわりに

実習を通して、ごく一部ではあるが日本語教師の仕事を経験し、具体的なイメージをつかむことができた。同時に、理想の教師像について改めて考えるきっかけとなつた。

授業見学では、先生方が学生にわかりやすいように内容はもちろんのこと、話し方や授業の展開、板書にも工夫をされていることがわかつた。そのような工夫は、先生方が長年の教壇経験で培つておられたものであると、実際に授業を行つてみて実感した。また、教壇実習では様々な観点からご指導いただき、自分自身に足りない点やより良い授業の在り方を見つめなおすことができた。実際に日本語教師として働き始めると、他の教師からフィードバックを受ける機会は多くないであろう。だからこそ、この実習期間中にたくさんの先生方から頂いたアドバイスや改善点に関するコメントは、我々実習生にとって大きな財産になった。

最後に、お忙しい中、丁寧にご指導してくださつた大阪日本語教育センターの先生方、熱心に授業に取り組んでくれた学生の皆さん、そしてこの実習の機会をくださつた日本語専攻の先生方に心より感謝申し上げます。ありがとうございました。



写真3 担当クラスの学生たちと